

唐古・鍵遺跡

むきばんだやよい塾 塾長 藤田憲司

弥生土器研究のバイブル 『大和唐古弥生式遺跡の研究』

8 月のやよい塾のテーマ「唐古・鍵遺跡」は、塾生さんからのたつての希望だったと聞いている。考えてみると、四半世紀に渡るやよい塾で、弥生時代の大和の話はほぼ記憶にない。大和の弥生遺跡の代名詞は唐古・鍵遺跡。この遺跡を語る人は、藤田三郎さんを措いてほかにない。

遺跡の紹介に当たって、その研究史から語ることが必要な遺跡はめったにないと思う。唐古・鍵遺跡は日本考古学研究史上、それほど重要な位置を占めている。1936 年、国道建設のための土砂採取地になった唐古池の土取り工事と並行して、末永正雄博士による発掘調査が行われた。その調査研究成果は、『大和唐古弥生式遺跡の研究』という不朽の大著になって 1943 年に刊行された。太平洋戦争最中に執筆・刊行された諸先達のご苦労は、想像を絶している。

藤田三郎さんは、大学時代にその希少本を大変な苦労して手に入れたとのこと。わたしは入手できなかったが、この大著は、弥生時代を研究テーマにする者にとって、必ず学ばなければならないバイブルのような書であり、そこに記された土器編年は、今もなおその輝きを放っている。

弥生時代だけではないが、考古学の研究では、時間的な前後関係を把握することが第一歩の作業だ。弥生時代の前後関係を示すとき、前期・中期・後期とか**式という用語を用いる。本塾の講座の中でも、何度も耳にされたはずだ。藤田さんは、講義の中で一度だけ唐古第一・第二・第三（ローマ数字で表記することもある）様式……を口にされたが、それは畿内第一様式……という言葉に置き換えられ、全国的には弥生第一・第二様式……として用いられている。中期だけ第二・三・四様式に三分されている所以もそこにある。

その時期区分は、いまから 80 年余前の『大和唐古弥生式遺跡の研究』で示された編年案を踏襲したものだ。要するに、唐古遺跡の編年研究が弥生土器編年の始まりであり、その後の基準になり、現在も使われているのだ。

唐古・鍵遺跡の意義に学ぶこと

唐古・鍵遺跡の意義について、唐古・鍵の主である藤田三郎さんを差し置いて語る資格はないが、一つだけ、外野席からこの遺跡の意義を記しておきたい。唐古・鍵遺跡が弥生土器編年の基準になれたのは、遺跡の継続性にある。その継続性によって、唐古・鍵遺跡は稀有の存在となっている。

わたしも、岡山県上東遺跡の調査・整理に携わり、津島遺跡の前期の土器整理にも関わって、瀬戸内の土器編年を試みたことがある。弥生時代の集落形態と墓制を比較するために、瀬戸内・山陰・九州・関西の土器の並行関係に関心を払ってきた。大阪府に拠点を移し職場体験をとおして、府内には弥生前・中期の拠点集落は幾つもあるのに、弥生前・中期から後期後半まで継続する拠点集落がないことに気付いた。

よくよく考えると、のちに北部九州で確立された弥生早期はさておき、前期から後期までの土器編年を、一つの遺跡で出土した土器だけでほぼ完結できるのは、唐古・鍵遺跡くらいではないだろうか。福岡県板付遺跡や奴国の候補地である那珂遺跡群などの北部九州の代表的な遺跡でもすべての時期が十分に揃っている訳でなく、他の遺跡の資料で補完しなければならない。瀬戸内地域や山陰地域でも唐古・鍵遺跡に匹敵する遺跡はない。

唐古・鍵遺跡のように前期から後期まで継続した集落がほかにもあった（ある）かもしれない。ただ、後世の開発や土地利用の改変によって、唐古・鍵遺跡のような規模で弥生時代各時期の集落の景観を復元できる遺跡は、ほかにはなさそうだ。これもまた、この遺跡の存在価値を示す特性といえる。

前期から後期まで時期によって数は異なるようだが、地形の高い東側と低い西側で環濠の数が違う所以も講義の中で伺った。巨大な柱群をもつ建物が何棟も造り直されただけでなく、銅鐸や銅鏃を鋳込んだ工房址や鋳型が多数出土しているのも、畿内では稀な存在といえる。藤田さんはさりげなく語ったが、記憶にとどめておきたいと思ったのは、唐古・鍵遺跡を含む領域を、纏向遺跡を南東限域とした東西南北数キロにある遺跡群を一つのまとまりで示してくれたことだ。

その規模は、魏志倭人伝に記された伊都国や奴国の単位に当たるようだ。大和の中のヤマトのまとまりを示してくれたのではないか。藤田さんの考えを拝聴したくなった。

唐古と絵画土器

唐古・鍵遺跡の魅力ないしその意義を、1回の講義で語るのは至難のことだ。今回紹介してくださったのはその一端にすぎない。唐古池の一面に建っている楼閣の復元のもとになったのは絵画土器である。藤田さんによると唐古・鍵遺跡とその近所の清水風遺跡を合わせて524点の絵画土器が出土しているとのことだ。

全国で確認される絵画土器の半数ほどが、この二遺跡で出土しているという。今回の講座では、楼閣の復元に関係した絵画土器と「竜」を表現した可能性がある絵画土器の一部が紹介された。もう少し伺いたかったが、時間が足りなかった。

しかし、願いは叶うようだ。今回の山陰来訪の機会に調査した鳥取県出土の絵画土器の検討成果を加え、来年度のやよい塾で絵画土器についてお話し頂けるとのこと。藤田さんは、絵画土器の研究でも知られる研究者である。楽しみに待ちたい。